

Hermes Courier

小樽商科大学 広報誌

2008.3

第19号

ヘルメス・クーリエ



2号館5階より小樽市街を望む

特集：自慢にならない？商大ジマン！1

『蟹工船』エッセーコンテスト授賞式が行われました
『古瀬大六文庫』が誕生しました3

商大雪あかりの路
商大の宝物
「伴房次郎肖像画」4

秋山義昭学長の退任記念最終講義
百周年記念連載コラム5

シリーズ先生紹介 第15回
大矢 繁夫 教授6

INFORMATION7



2008年商大雪あかりの路



特集

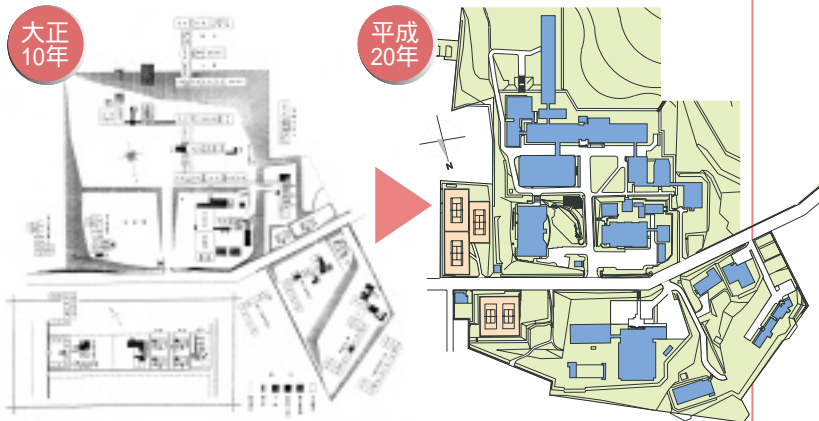
自慢にならない？

商大ジマン!

「国立大学法人で唯一の社会科学系単科大学」、「北日本唯一のビジネススクール」、「徹底した少人数教育及び外国語教育」、「幅広い国際交流」、「充実した図書館」、「抜群の就職実績」、「結束力の高い同窓会」など、小樽商大は数多くのセールスポイントを持つユニークな大学です。ですが、折に触れて強調されるこうした「公的な」自慢の他にも、商大ならではの特徴というものは存在します。それが自慢になるのかどうかはわかりませんが、今回は編集長鈴木氏の独断と偏見のもと、敢えて「商大ジマン」として誇らしげに紹介したいと思います。商大が普通の大学でないことだけはこれでお分かりになることでしょうか。ただ、独りよがりになるのもいけないので、「異論」をつけさせていただきました。はてさて、読者の皆さんはどうお考えになりますか？

ジマン1 開校当初のキャンパスと今のキャンパスの形がほとんど同じ!

日本の高等教育機関は、明治時代の創設期から現在まで絶えずその姿を変えてきました。様々な旧制大学、旧制高校、旧制専門学校が生まれ、それらの学校が名称を変え、また色々な合併を行い、戦後は新政大学へと大々的に統合されました。ですから現在の国立大学の前身は、複数の旧制学校であることが普通です。そうした大学の創立年は、学部ごとによって変わってしまうので、多くの国立大学は戦前からの伝統があるものの、正式な創立年を新制大学が発足した1949年にしています。ところが、小樽商大の場合はそうした問題が発生しません。その沿革は、内部での改組はたびたびあったものの、簡単にいえば「小樽高商 - 小樽経専 - 小樽商大」これでほぼ言い尽くされてしまいます。実にすっきりしているではありませんか。ですから商大の創立年も、1911年と正式に主張することができるのです。これまで他の学校との合併を経験して



こなかった商大には、「ジマン3」の項で述べる特徴など、小樽高商時代の校風が今なお色濃く残っていますが、その目に見える証ともいえるのが、創立時とほとんど同じ形を保っているキャンパスなのです。

異論

古いキャンパスが残っているのはいいが、古い建物が残っていない。

ジマン2 眺望最高!

これは正式な自慢にしてもいいくらいなのですが、商大から見る小樽の風景は絶景の一語に尽きます。実は日



コンピュータ・ラボからの小樽市街の眺め

本は海に囲まれた国であるにも関わらず、校舎から海が見渡せる大学は意外に少ないのです。特に国立大学に関しては私の知るところ、海が見える大学は数校しかありません。そうした中で、緑が丘の中腹を切り開いて設置された小樽商大からは、こぢんまりとした小樽の街と港全体を一望に見渡すことができ、夜景と合わせて全国の大学中随一とも呼べそうな眺望を誇っています。初夏のうららかな昼下がり、2号館5階のコンピュータ・ラボや5号館4階の大講義室、あるいは図書館開架閲覧室の眼下に広がる小樽の眺めに、思わずペンを持つ手を休めたことのある学生も、ひとりやふたりではないでしょう。

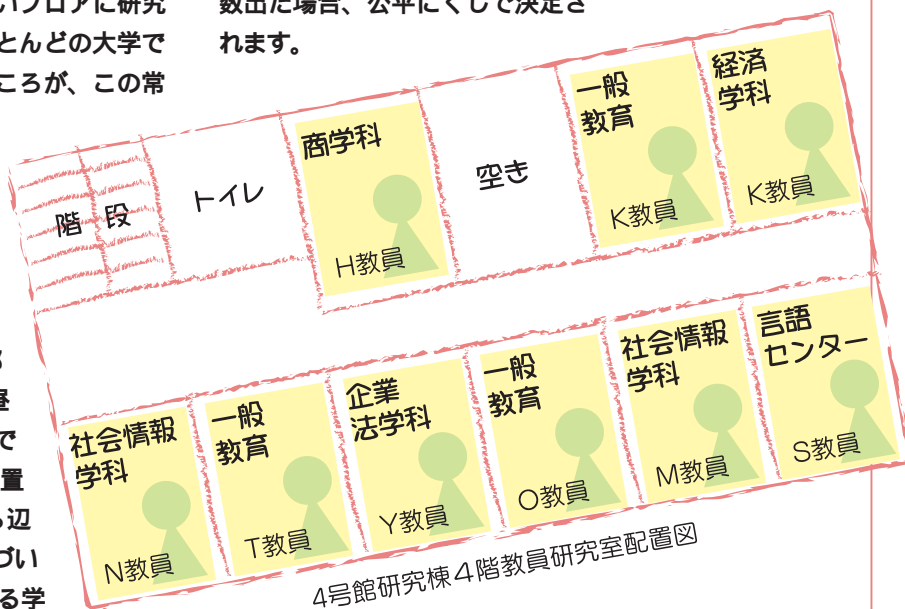
異論

眺めがいいのは分かるけど、地獄坂を上るのは少々しんどい。

ジマン3 研究室を引っ越せる!

大学の先生は、「研究室」という普段研究する部屋を大学から貸与されています。この研究室の配置に関しては学科単位、または専攻単位で置かれるのが常識です。つまり、同じ学科や専攻の先生方は大体近いフロアに研究室を持つものなのです。この不文律はほとんどの大学で守られているといいでしょう。ところが、この常識が商大では通用しません。先生方の研究室配置は、学科・専攻に全く関係がないのです。ですから、空き研究室ができると希望者が学内公募され、別の学科の先生が遠くの研究室から引っ越してくるなどという事態も商大ではしばしば起こります。以前は夜間短期大学部もありましたが、その校舎の研究室にも昼担当の先生が入っていたりしたという話です。私は赴任当時、この商大の研究室配置には本当に驚きました。ですが、ここら辺に、他に類を見ない商大独自の校風が息づいているのだと思います。教職員全員による学長選挙、教員採用完全公募制、学生の自主性の

尊重などに代表される、高商時代から続く民主的でレパラルな気風をこの研究室配置は象徴しているといえないでしょうか。なお、空き研究室への引越し希望者が複数出た場合、公平にくじで決定されます。



4号館研究棟4階教員研究室配置図

異論

初めて研究棟に行くと、先生の部屋がどこのか見当がつかなくて迷う。

ジマン4 最小にして最大!

小樽商大が小さな大学であることは全国的に有名です。そのとおりです! もっとも、「大きい、小さい」といってもいろいろな基準が考えられます。キャンパスの広さ、学生定員数、教職員数、予算規模などなど。そうした基準の大半について、商大は全国最小クラスの大学となりますが、特に毎年文部科学省から交付される「運営費交付金」の額で、商大は今年度実質的に最下位となりました! 別に開き直っているわけではありませんが、これ自体誇れることかもしれません。

なぜなら「出世力全国5位」にランクされるなど卒業生の活躍かんがを鑑みれば、商大は少ない予算で優秀な人材を育成している極めてコストパフォーマンスの高い大学であるともいえるからです。ところが、目を学部レベルに転じますと、商大の本体である商学部は、その学生定員数からいってかなり大きな学部となるのです。現在、1学年の定員数では、全国の国立大学法人社会科学系学部(経済学部、商学部、法学部など)の中で滋賀大経済学部(経済学部、商学部、法学部など)に次ぐ2番目に大きな学部なのです。でも、別に謙遜しているわけではありませんが、これ自体自慢にはならないかもしれません。

「週刊ダイヤモンド」2006年9月23日号

平成19年度 運営費交付金下位大学

(単位: 百万円、大学院大学除く)

筑波技術大学	2,622
奈良教育大学	2,565
北見工業大学	2,523
鹿屋体育大学	1,513
小樽商科大学	1,425
大阪外国語大学	1,308

大阪外国語大学は年度中に大阪大学に併合されたため、交付金は前年度より10億円余り減額

平成19年度 学生入学定員数上位社会科学系学部

滋賀大学経済学部	550
小樽商科大学商学部	515
長崎大学経済学部	415
和歌山大学経済学部	410
富山大学経済学部	405
東京大学法学部	400

異論

確かに何が自慢なんだかよく分からない。

『蟹工船』エッセーコンテスト授賞式が行われました



受賞者の皆さんを囲んでの記念撮影

小樽高商出身の作家、小林多喜二の命日（多喜二忌）である2月20日（水）、本学マルチメディアホールにおいて「Up to 25 『蟹工船』エッセーコンテスト」（小樽商科大学と白樺文学館多喜二ライブラリーの共催）の授賞式が行われました。

『蟹工船』は多喜二の代表作として知られ、真冬のオホーツク海の蟹工船における過酷きわまりない労働とそれをめぐる労働者と資本家との闘いを描いた作品です。今回のコンテストは応募資格を25歳以下とし、現代の若者がこの作品をどう読み何を感ずるのかとい

うテーマのもとに行われました。最終的に国内外から117編もの力作が寄せられ、今回そのうちの17編が優秀作として表彰されました。

大賞（小樽商科大学学長賞）を受賞された山口さなえさんの「二〇〇八年の『蟹工船』」は、物語の世界と現代の労働現場の実情を重ね合わせたもので、社会への鋭い視点と主張の力強さが高く評価されての受賞となりました。また、準大賞（白樺文学館館長賞）を受賞された小嶋森人さんは小樽在住の中学生ですが、物語を読み解く柔軟な視点やしっかりとした文体はすべての審査員をうならせるものでした。

没後75年を経てなお輝く小林多喜二の足跡。若者たちはそこに貧富格差の問題や人間の尊厳等、現代の日本に共通する問題をそれぞれ敏感に感じ取っていました。受賞作品の表現を借りれば、現代においても「多喜二の役割は終わらない」といえそうです。

なお、受賞作品および審査員の講評につきましては『私たちはいかに「蟹工船」を読んだか - 小林多喜二「蟹工船」エッセーコンテスト入賞作品集』（遊行社）として出版されております。機会がありましたら、ぜひ一読ください。

『古瀬大六文庫』が誕生しました

1950年から1973年まで本学で教鞭をとられた古瀬大六先生が昨年4月にお亡くなりになりました。このたび、ご遺族のご厚意により先生の蔵書（図書236点、雑誌1654点）を附属図書館に寄贈いただき、『古瀬大六文庫』として公開させていただくことになりました。

古瀬先生はご息女・山下和美さんの人気漫画『天才柳沢教授の生活』の主人公・柳沢良則教授のモデルとして有名で、漫画のなかに柳沢教授が小樽商大を訪れる様子が描かれたこともあります。漫画のなかの柳沢教授は本をこよなく愛するキャラクターとして描かれていますが、実際の古瀬先生も附属図書館長を務め、海外の図書館を研究して閲覧室の大改造を行うなど、本と読書への強い思いをお持ちの方でした。今回公開された先生の蔵書はいずれも深く読み込まれ、一部には緻密な書き込みなども残されており、先生の真摯な学究の跡を見ることができます。



本学同窓会の広報誌「緑丘」に原画で寄せられた山下和美さんの漫画



商大雪あかりの路



秋山学長を中心に実行委員の記念撮影。



「小樽雪あかりの路」が10周年という記念すべき今年。「雪とローソクによる温もりある情景の演出」、「おもてなしの心・人と人との心のつながり」という原点に戻る年でした。

今年は、職員スタッフだけでなく、30名を超える学生スタッフという力強い仲間が加わり、念願だった「学生・教職員が一体となったボランティア活動」が実現しました。

運河会場でのオブジェ作り・市のボランティア活動を通じて、「小樽雪あかりの路」を支え続ける市民の温かい心を感じ、その心こそがこのイベントの強さなのだと、改めて実感することができました。

実行委員長 河崎 智之



石井 柏亭画 小樽高商第二代校長 「伴房次郎肖像画」

本学史料展示室所蔵



小樽商大は、伝統ある大学には珍しく学内にひとつも銅像が見当たりません。しかし、歴代校長・学長の姿は、肖像画として残っています。(現在は同窓会による寄贈)それぞれ名のある画家が描いたこれらの肖像画のうち、とりわけ第二代校長伴房次郎を描いた作品は、当時日本画壇の第一線で活躍し、仏政府よりレジオン・ド・ヌール勲章を贈られた石井柏亭(本名満吉)の筆によるものです。今回は柏亭作品に造詣の深い東京国立近代美術館長の辻村さんに画家についての解説をお願い致しました。読者の皆さんも機会があれば、東京国立近代美術館所蔵の柏亭作品をお楽しみ下さい。

石井柏亭について

東京国立近代美術館長 辻村 哲夫

終生自然主義を貫き、また紀行の画家としても知られる石井柏亭は明治15年東京に生まれた。早くから絵の才能を開花させ、10歳で日本美術協会などに出品するほどであった。

画家としての活動は多彩で、日本水彩画会、二科会、一水会等の創立にかかわり、評論活動にも大いに活躍した。なかでも高村光太郎との美術論争は有名である。

当館には、風景画・人物画等合わせて12点の柏亭の作品があるが、このうち、少年少女が日差しを浴びながら枯れ草の上で寛ぐ「草上の小憩」(明治37年)は、日本近代美術史を概観して頂く当館常設展示場の冒頭を飾る明治・大正期のコーナーに黒田清輝、和田三造らの作品と並んで展示されている。

また同じく当館所蔵の「阿武隈小春」(昭和33年)は、77歳の柏亭の絶筆となった作品で、ゆったりと流れる阿武隈川の情景の透明感のある静謐な画風は、見る者にいつも心の安らぎを与え続けている。



秋山義昭学長の 退任記念最終講義

3月末の任期満了に伴い退任する秋山義昭学長の最終講義が、1月30日（水）160番講義室で実施されました。

秋山学長は、昭和44年に商大へ赴任し、学生部長、副学長を歴任、平成14年4月からは学長に赴任され、計39年間の長きに渡り商大の教育研究等に尽力されました。

最終講義は「私の学問と実務」と題し、秋山学長の専門である行政法学という学問の役割や商大の法人化後の学長としての実務などについて語り、時には、「法人化前に北海道労働委員会公益委員として不当労働行為の審査等を行ったが、まさか大学が法人化して自分が労働組合と団交することになるとは夢にも思わなかった。」と会場を笑わせるなど、ユーモアを交えた講義が行われました。

この講義は、一般市民にも公開され、多くの市民が参加し、教職員、学生合わせて約150名が熱心に耳を傾けていました。講義が終わると市民や学生、教職員を始め、この日のために駆けつけてくれた教え子達から多くの花束が贈呈され、秋山学長の人柄を感じさせる最終講義となりました。



百周年記念

1

連載コラム



小樽商科大学は、明治44年（1911年）5月、全国で5番目の官立高等商業学校として開校された小樽高商の設立に始まり、平成23年（2011年）に創立百周年を迎えます。

学内ではこの記念すべき節目の年を迎えるにあたり、委員会を設置して様々な記念事業の計画を立てています。すでに本誌でもいくつか紹介していますが、3年後に迫った今年には具体的な事業が明らかになってくる予定です。本号からは連載でその内容をご紹介しますと共に、創立百周年に関わるニュースをお届けします。

学生寮建設を検討

小樽高商開校以来、本学には北斗寮はじめ、いくつもの学生寮がありました。全国から集まった学生達が生活を共にする学生寮は、勉学のみならず人格形成においても重要な存在でした。その後、昭和59年の智明寮廃寮を最後に学生寮は大学から姿を消してしまいました。

創立百周年を機に、かねてからの念願であった学生寮新設構想に着手し、ニーズの把握や資金面、建設場所等を検討しています。これから順次進ちょく状況等を本誌やホームページ等でお知らせします。



北斗寮（1913年～1960年）

JR北海道情報誌に小樽商科大学の特集記事掲載

道内の特急列車で配付されているJR北海道の情報誌12月号に、特集記事「小樽高商、青春グラフィティ」が掲載されました。

伊藤整、小林多喜二にスポットを当て、「実学」教育をモットーに経済人を育成していた小樽高商と文学との関わりや、彼らを輩出した小樽の風土、高商の学風を、百年の歴史と共に紹介しています。

大学内での取材の他、小樽市文学館や緑丘会本部でも取材が行われました。



「小林多喜二～いのちの記憶～」ドキュメンタリー制作

HBC制作ドキュメンタリー番組「小林多喜二～いのちの記憶～」が企画されています。この番組は白樺文学館の協力により制作されるもので、小林多喜二と伊藤整、二人の人間性を深く掘り下げ、当時の小樽高商の情景を

入れたドキュメンタリーとなる予定です。番組の合間に「小樽商科大学の100年」を広告として挿入するため学内でも撮影が進められています。番組放映は5月31日（土）13:05～14:30の予定です。お見逃しなく。

銀行はどこへ向かうべきかに 大きな関心を持っています

今回の先生紹介は、この4月から「理事（教育担当副学長）」に就任する大矢繁夫教授です。

先生の専門である銀行の話から理事に就任するに当たっての抱負まで、興味深い話をたくさん聞かせていただきました。

- 先生が小樽商科大学に勤めるまでの経歴についてお聞かせください。

大矢：1948年に札幌で生まれたということで、ちょうど「団塊の世代」に当たります。1967年に本学に入学しましたが、学生紛争の影響で大学が封鎖されていた時期があったことから、卒業まで5年間かかりました（笑）。学部の間は、井上巽先生（現名誉教授）の研究室で経済史を勉強し、卒業論文は「株式会社制度の分析」を書きました。

学部卒業後、東北大学の大学院に進みました。当時東北大学の大学院は小樽商科大学の出身者が多かったのです。大学院では、「経済政策総論」講座の下で金融について研究し、修士論文ではヒルファーディングの金融資本理論について書きました。

その後、福岡の西南学院大学に勤めた後、1995年に小樽商科大学に戻ってきました。それから今年で13年になります。

- 先生の担当されている授業についてお聞かせください。

大矢：学部では、2年生向けの「社会と金融」と3年生向けの「銀行論」を教えております。「社会と金融」は、専門科目の導入と位置づけしており、日経新聞に書かれていることを理解することを目標としています。「銀行論」では、銀行の制度や機能・システム、つまりマネーを作り出すシステムについて講義しています。今の日本では、日銀券が70兆円ありますが、実際に流通しているマネーは700兆円もあるんですよ。このように、銀行はマネーを作り出しており、それは社会自体を編成することでもあるのです。ドイツの銀行は、「国家は自分たちである」という自負心を持っているといわれます

が、銀行というのは本当に大きな力を持っているんですよ。

- 目下のところ先生は何に関心をお持ちですか？

大矢：銀行は現在今までのビジネスモデルの限界に直面しています。具体的にいうと、日本の大手銀行の貸出先は6割が中小企業であるなど、現在の銀行はリスク性を強めています。また、銀行業務は手数料業務といわれる仲介が中心になってきています。そうした中、銀行はどこへ向かえばよいかということに関心を持っています。その一つの答えは、「環境金融」や「CSR（企業の社会的責任）金融」と呼ばれる公共性を持った金融であり、日本でも総資産の0.1%（1000億円）くらいのファンドになっています。また、銀行は新しい分野に挑戦すべきですが、その一つは地場の支援であり、銀行は地場産業の支援により初めて地元で支持されるものになれるように思います。

- 先生はこの4月から理事（教育担当副学長）に就任されますが、就任に当たっての感想や抱負をお聞かせください。

大矢：今回就任を打診されたことは青天の霹靂ですが、商大のために「もっと働きなさい」ということだとも思っております（笑）。この大学は、教職員の質が高く、若い人が動きやすく、そして何よりも小さな大学のため理想的な教育のできる大学です。特に、小樽商科大学でこそ可能な教員と学生が密着した教育をさらに充実させ、学生が自覚的に自分の能力を磨ける大学にしていきたいと思っています。



おおや しげお
大矢 繁夫 教授
商学科・銀行論

1972年 3月 小樽商科大学商学部経済学科卒業
1978年 3月 東北大学経済学研究科博士課程単位修得退学
1978年 4月 東北大学経済学部助手
1981年 4月 西南学院大学商学部助教授
1987年 4月 同 教授
1995年 4月 小樽商科大学商学部教授
2008年 4月から 小樽商科大学理事（教育担当副学長）

- 最後に商大生にメッセージをいただけますか。

大矢：最近では気弱になりやすい学生が多いような気がします。そのため、心を強くして努力を嫌がらないようにしてほしいと思います。特に、自らをさらけ出すことを嫌がらないでほしいですね。



次期学長紹介

山本 眞樹夫 (現理事：総務・財務担当副学長)

学長就任にあたって

この4月より、思いもかけず学長という重責を担うこととなりました。私は、厳密に言えば新潟生まれですが、量徳小学校、いまはない住吉中学校、潮陵高校、小樽商科大学(大学院修士課程まで)で学びました。その後、仙台と会津若松に7年ほど居ましたが、1982年に母校商大に教員として戻ってきました。ですから、生粋の小樽っ子だと自負しています。

商大は創立以来、小樽市民の熱い思いに支えられてきた大学です。私自身、子供の頃から商大生を特別の存在と思っていました。あと3年、2011年に商大は100周年を迎えます。この100周年を市民の皆様とともに祝いたいと思っています。

財政規模からいけば日本一小さな国立大学ですが、伝統ある名門大学として全国の、そして世界の若者から憧れの対象となり、尊敬される大学を目指して、微力ながら尽力したいと思っています。



略歴

昭和47年 3月	小樽商科大学商学部卒業
昭和53年 4月	福島県立会津短期大学講師
昭和56年10月	同 助教授
昭和57年 4月	小樽商科大学商学部助教授
平成 2年10月	同 教授
平成 8年 7月	同 学生部長 (～平成12年6月)
平成14年 4月	同 副学長 学術担当
平成16年 4月	国立大学法人小樽商科大学 理事(総務担当副学長) 兼 大学院研究科長
学位 / 博士(経済学)	
専攻 / 財務会計論	

INFORMATION

平成20年度公開講座・公開授業のお知らせ

「外国人による集中外国語講座シリーズ」

- ・英語、韓国語、ロシア語、中国語の各講座
- ・4～7月実施予定

「夜間主コース通常授業公開講座」

- ・前期募集期間：4月7日～18日
- ・試聴期間：4月7日～15日までの本学学生オリエンテーション期間
- ・公開する授業科目等詳細は下記へお問い合わせ下さい。

TEL0134-27-5244 学務課学部教務係

商大生がダーツバー「Yo-chan Bar」を経営

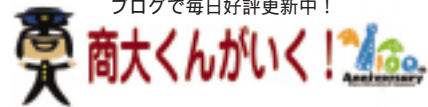
昨年10月、商大生が経営するダーツバーが誕生しました。南国風のお洒落な店内とダーツのエレクトリックさが絶妙な雰囲気のお店です。一度足を運んでみて下さい。

営業時間：18：00～24：00 定休日：日曜日、月曜日
 住 所：小樽市色内2丁目10-23 スリラーカラオケすぐ近く
 電話番号：0134-33-1777 e-mail: strad@yo-chanbar.com

平成20年度前期行事予定

- 4月 4日 入学式
- 7日 授業開始
- 6月 27日～29日 大学祭
- 7月 7日 創立記念日
- 28日～8月4日 前期定期試験
- 8月 5日～9月30日 夏季休業
- 上旬 オープンキャンパス
- 15日 緑丘戦没者慰霊祭
- 9月30日 学位記授与式 (9月卒業)

学生や先生の活動、イベント、学内の風景等をブログで毎日好評更新中!



<http://d.hatena.ne.jp/shoudai-kun/>

商大グッズ

商大グッズ新商品誕生!

日本酒「小樽緑丘」、酒饅頭「商大饅頭」に続く『商大認証グッズ』として、シャープペンシル、ボールペン(各白・黒2色)が誕生し、商大生協のグッズコーナーに並びました。『商大認証グッズ』には、認証シールが貼ってあり、現在新商品の企画が進んでおりますのでこのコーナーも更に充実したものになっていきます。ご期待下さい。



認証シール



シャープペンシルとボールペン

編集後記

小樽商大のウラ自慢を私もひとつ。- 商大出身者は足腰が強い - 現在の学生もそうですが、地獄坂を登るバスがなかったころの学生はもっと遅かったことでしょう。私も健康のために、たまには地獄坂を歩いて登ろうと思うのですが、キロの巨体を山上まで運ぶのはなかなか...

さて、今年も約500名の卒業生が緑丘から巣立っていきます。在学中に鍛えた足腰でそれぞれのフィールドで活躍してくれることと思います。彼らへのご指導、ご鞭撻をよろしくお願いたします!(S)

編集スタッフ 鈴木将史、杉山 成、今本啓介

【ご意見・ご要望のお願い】

広報委員会では、読者の皆様のご意見・ご要望をもとに、より良い広報誌を作成する所存です。取り上げてほしい話題、質問したいことなど何でも結構ですから下記にお寄せください。

E-mail : kouhou@office.otaru-uc.ac.jp FAX : 0134-27-5213

URL <http://www.otaru-uc.ac.jp>